

露で暮らす移民労働者の思い



山衛守 剛

中央アジアやコーカサスの料理店が軒を連ねるモスクワ郊外のフードコート。注文を取りに来た従業員の中年女性に日本人であることを明かすと、女性はテーブルの椅子を引いて私の正面に座り、詰め寄った。「日本で働けないだろうか」

彼女はウズベキスタン出身。モスクワでは十分な稼ぎが得られないらしく、他の国での就労を希望していた。日本語ができなければ難しいと伝えると、ため息をついた。「できればドバイに行きたいけどそれも難しい。ここで頑張るしかないか」とこぼして仕事に戻っていった。

人口減少に悩むロシアでは労働者不足が常態化し、移民の労働力が不可欠な状況にある。特に旧ソ連だった中央アジアのキルギスやタジキスタン、ウズベキスタンからの出稼ぎが多く、飲食店やタクシー、工事現場、清掃などの仕事に従事している。

ただ、モスクワで生活していると、中央アジアの人たちに対するロシア人の厳しい視線もしばしば感

じる。移民が比較的多く暮らすモスクワ南部のあるエリアを歩いたと知人に話すと「あそこは治安が悪い」と注意を促された。地下鉄の車両内で談笑していた5、6人の若者が、数人の移民たちが母国の言葉で大声で話しながら車両に乗り込んで来るのを見て会話を中断し、全員で軽くならみつけるような場面にも遭遇した。移民への差別的な態度は日本を含む他国でも昔からある。ロシア人だけを批判しようとは思わない。ただ、中央アジアの労働者たちにとってロシアは住みやすくはないだろうとも察する。

移民の暮らし向きはどうか。露西部やロスラブリでタクシー運転手を10年続けているタジキスタン人男性に聞くと、月給は10000^{ドル}（約14万5000円）程度。日本よりも物価が高く、インフレの進行が著しいロシアで生活するには厳しい額だ。

母国の賃金はもつと安いのかと問うと、安いではなく仕事そのものがないと嘆いた。「トヨタはタジキスタンに工場を造らないのか」と冗談めかし、こう言った。「私の母国は自然豊かな美しい国だ。本当は帰りたい」。このような思いを抱える人たちは少なくないのだろう。さまざまな思いを抱えながら、移民労働者たちは今日もロシア経済を支えている。